

# 平成19年度重点プロジェクト事業（海外派遣研究員等旅費）報告 6th International Symposium on Computer Science in Sports に おける研究発表

高橋仁大\*

今回、学長裁量経費により 6th International Symposium on Computer Science in Sports 2007 (以下、IACSS2007) における研究発表の機会をいただいたので、ここに報告する。



IACSS 2007 Brochure

IACSS2007 は2007年6月3日から6月7日にカナダ・カルガリーのカルガリー大学 (University of Calgary) で開催された。カルガリーといえは1988年の冬季オリンピックの開催地であり、市内には当時の施設などが公園や観光地として点在している。市内中心部にあるカルガリータワーからはジャンプ台なども一望でき、カナダにおける冬季スポーツの盛んさを物語っているといえよう。



カルガリータワーからの眺め

今回はカルガリー大学の体育学部 (the faculty of kinesiology) が主管となって開催された。このカルガリー大学・体育学部のキャンパス内には、カルガリーオリンピックにあわせて建設されたスピードスケートリンク、通称「オーバル」が鎮座する。「オーバル」は高速リンクとも言われ、高記録が生まれやすいリンクとして知られている。オーバ



スピードスケートリンク「オーバル」の内部。訪問時は夏季休業中であった。

\*鹿屋体育大学スポーツパフォーマンス系



カルガリー大学・体育学部イメージキャラクターの恐竜

ルのレセプションには過去のオリンピックや世界選手権などの記録や記念品が展示され、その歴史を知ることができる。大学の敷地内にオリンピックを開催した競技場があるということは、体育系の学部としては大きなネームバリューになるものと思われた。

さて IACSS は今回で第 6 回目の開催であり、初のヨーロッパ以外の国での開催ということであった。過去にはヨーロッパ内で表の通り 5 回開催されてきている。

表 過去の IACSS 開催年と開催地

回	年	都市	国
第 1 回	1997	ケルン	ドイツ
第 2 回	1999	ウィーン	オーストリア
第 3 回	2001	カーディフ	イギリス
第 4 回	2003	バルセロナ	スペイン
第 5 回	2005	フヴァル	クロアチア
第 6 回	2007	カルガリー	カナダ(今回)
第 7 回	2009	シドニー	オーストラリア

IACSS2007 はワインと軽食によるオープニングレセプションとキーノートアドレスで幕を開けた。



口頭発表の様子

IACSS の会長であるウィーン大学の Dr. Baca からは IACSS のこれまでの歴史ならびに変遷が示され、今後の方向性に関する提案がなされた。またマインツ大学の Dr. Perl からは Computer Science と Sports とがどのように関わっていくかについての知見が示され、また IT の発達に伴う同分野の重要性が改めて示されるものであった。

我々の発表演題は「The development of computerised scorebook for tennis」であった。重点プロジェクトで進行中のテニスの電子スコアブックの開発にあたっての、測定精度の信頼性についての研究成果を発表した。今学会での発表がアクセプトされた際には、ポスター発表との連絡を受けていたので、出発の一週間前にはポスターを完成させていたのであるが、出発の三日前になって同学会の Web で発表されたプログラムでは口頭発表の一角に位置づけられていた。どういう経過でそうなったのかは定かではないのだが、国際学会ではよくあることと割り切り、またよい経験になると考え直し、大慌てで準備をした。発表後の質疑応答では、同スコアブックの実践現場での活用可能性についてのコメントを求められ、現段階ではプレーヤーの評価指標について検討中であることから、実践への活用はその後の課題であることを述べた。ただこういったツールの開発にあたっては、その後の実践での活用はどうつながっていくか、という点が重要な視点であるということ再認識することができた。



Dr. Ariel によるプレゼンテーションの様子

学会最終日、午前のキーノートアドレスはDr. Ariel による「Sports Technologies From Mexico City Olympics, 1968 to the Future Olympics in Beijing 2008」と題された講演で、バイオメカニクス分野におけるコンピュータの歴史の概観であった。高速度撮影された写真や映像を初めてスポーツ場面に活用した同氏の研究の一端に触れ、また貴重な写真や映像の数々を見ることができ、スポーツ科学における第一人者とはかくあるべき、ということを実感することのできた講演であった。

他の研究発表においては、健康分野との関連を持った研究がいくつかみられた。特に北米の研究者からの家庭用ゲーム機を活用した健康運動の実践についての研究は興味深いものであった。近年の家庭用ゲーム機の発達により、家庭で運動の「疑似体験」をすることや、実際に身体を動かして行うゲーム等が開発されてきている。これらが日常の運動不足の解消に本当に役立つかどうかについて、実践的に研究を行っていた。特に顕著な肥満が問題視されている北米ならではの研究であるといえるだろう。

我々のほかにも日本からは国立スポーツ科学センター (JISS) の宮地先生、清水先生、順天堂大学の廣津先生、産業総合研究所の吉川博士、関西大学の岩壺先生、三木先生が参加されており、貴重な情報交換の場ともなった。特に JISS の宮地先生とは帰国の行程が途中まで同じだったことから、スポーツにおけるビデオ映像の活用方法や今

後の研究の方向性についてといったことまで幅広く議論していただき、大いに参考になった。



地元カナダのグレッチェン夫妻、JISS の宮地先生、清水先生と

また学会期間中には世界のゲーム分析研究の中心人物であり、昨年の学会で交流を持つことのできたウェールズ大学の Prof. Mike Hughes ならびに Dr. Peter O'Donoghue とも再会し、今後の研究活動に対する示唆を得ることができた。本年度(2007年度)は文部科学省の海外先進研究実践支援プログラムで両氏の研究所を訪問する機会を得ていることから、今後も友好な関係を築いていけるよう、連携を取っていききたいと考えている。



Prof. Mike Hughes のプレゼンテーション

私自身にとっては国際学会での発表の経験自体がまだ乏しく、これからも精進していくことが必要と考えている。自分たちの研究成果を知らしめることもさることながら、同分野の世界の研究者と交流を持ち、情報交換を行っていくことも、こ

ういった学会に参加することの大きな意義といえるだろう。コミュニケーションをとるためには、もちろん語学は大事であるが、そのツール（語学）を活用できるだけのコンテンツ（自分自身）がなければ、いくら上等なツールを持っていても、それは宝の持ち腐れといえるだろう。常にコンテンツを磨いて、次の機会に備えようと思っている。

今回このような機会を与えてくださった芝山学長、井上系主任、その他各位に厚く御礼を申し上げます。